

TMT多天体補償光学系 実現に向けた要素開発

秋山 正幸 (東北大学理学研究科・天文学専攻)

2012/12/17 第二回可視赤外線観測装置技術ワークショップ

すばる 8.2m 望遠鏡から 2020 年代は次世代 30m 地上超大型望遠鏡へ 16 倍の集光力、 4 倍の空間分解能、 背景光限界では 16 倍暗い点源を検出できる。



TMT 初期装置群



科学目標:銀河の内部構造の進化



重力レンズを用いて有効的に 100pc (20-40mas) の分解能で z=3 銀河を観測 した例 (Stark et al. 2008 Nature, 455, 755)。この空間分解能を達成すること で遠方の銀河が回転している様子が始 めて確実に捉えられた。



装置仕様概略 (TMT-IRMOS)

波長	0.8-2.4um	
視野	5分角直径の視野	
空間サンプリング	0.05x0.05秒角、2.2秒角視野	~2000 空間素子数
分光器の数	20台の IFU	天体の密度
波長分解能	1000-20000 (一度に1オクターブをカバー)	
感度	スカイバックグラウンド	R~20,000 程度まで

これらの値は現状での目安であり、科学目標に基づいて技術的に可能な仕様を設定することが現在の可能性検討の目的である。





NFIRAOS and IRMOS

- 初期補償光学系 NFIRAOS = 多層共役 AO
 - High Strehl ratio correction in 10-30" fov.
 - IRIS : IFU spectrograph + 17.2"x17.2" imager
 - IRMS: NIR multi-slit spectrograph with 120"x120" fov : Keck MOSFIRE

- 次期補償光学系としての提案 IRMOS = <u>多天体同時 AO</u>
 - Simultaneous correction optimized for each object within d=5' fov.
 - IFU observation of ~20 objects simultaneously.

AO-PSF シミュレーション:初期(多層共役)補償光学系の場合



- NFIRAOS PSFs in 1"x1" scale, from 0" to 300".
- From bottom to top : J, H, K-band
- PSFs are shown in log-scale (faint end enhanced)
- Ensquared Energy within 0.05" ~50% up to 30"
- IRIS:
 - IFU 0.004"/element 0.5"x0.5" fov 0.05"/element 2.2"x4.6" fov
 - Imager 0.004"/pixel with 17.2"x17.2" fov

AO-PSF シミュレーション:多天体補償光学系の場合



- TMT-MOAO6 PSFs in 1"x1" scale, from 0" to 300".
- From bottom to top : J, H, K-band
- PSFs are shown in log-scale (faint end enhanced)
- Ensquared Energy within 0.05" ~50% up to 150"

TMT戦略的基礎開発研究経費 可能性検討と概念設計

- 2015年度までの要素開発でTMTへ向けた装置提案として概念設計に至ること を計画している。内容は
 - R&D 1. 地表層+多天体補償光学系のシミュレーションに基づくシステム検討 (大野発表を参照)
 - R&D 2. 大可変形鏡製作の基礎検討
 - R&D 3. オープンループ補償光学系の on-sky 実証実験
 - R&D 4. 地表層+多天体補償光学系の実験室実証、高速なトモグラフィー計算の実現
 - R&D 5. 多天体補償光学系 RAVEN の on-sky 実証試験
 - R&D 6. 小型多素子大ストローク可変形鏡の開発

TMT戦略的基礎開発研究経費 現在の体制

- 東北大学補償光学系グループ
 性能シミュレーション、要素技術開発、RAVEN開発への参加
 秋山 正幸、大野 良人(M2)、増田 貴大(M1)
- すばる望遠鏡補償光学系グループ
 システム検討、光学系基礎設計
 大屋 真、早野 裕、尾崎 忍夫、岩田 生、高見 英樹
- 3. 東北大学光 MEMS グループ

MEMS 可変形鏡の開発

羽根 一博、呉 同(D2)

年次計画

準備状況	2012(H24)年度	2013(H25)年度	2014(H26)年度	2015(H27)年度
R&D1 地表層+多天体補償光学系のシステム検討				
すばる補償光学				_
すばる望遠鏡 次世代補償光学系 検討	地表層補償光学系 の基礎光学設計	多天体補償光学系 の基礎光学設計	地表層 + 多天体補償光学系 の基礎機械設計	

<u>R&D2 大可変形鏡製作の基礎検討</u>

すばる補償光学 本申請経費にて外部発注で実行

要求仕様策定	製作可能性検討
製作可能性検討	見積もり

R&D3 オープンループ補償光学系の on-sky 実証実験

東北大補償光学		東北大補償光学
共同開発研究費にて実行		本申請経費にて実行
可変形鏡オープン ループ制御試験 小型EMCCD 高速読み出し試験	オープンループ 補償光学系 として評価試験	小型望遠鏡 での on-sky 実証試験



準備状況	2012(H24)年度	2013(H25)年度	2014(H26)年度	2015(H27)年度
R&D4 地表層+多天体補償光学系の実験室実証				
東北大補 若手研究(C	i償光学 i)にて実行 本	東北大補償光学 曲請経費 <i>にて</i> 実行		
多天体補償光学系	波面推定の 高精度化	大気揺らぎ 光学系の現実化		
光学系の立ち上げ	GPGPU並列計算に よる高速化の実証	性能評価		
R&D5 多天体補償光学系 RAVEN の on-sky 実証試験				
ビクトリア大 ビクトリア大		すばる補 本申請経費を	償光学 旅費に活用	
最終 光学機械設計	光学系の 組み上げと 調整	実験室での 補償光学系試験	ハワイ観測所 への輸送と すばる望遠鏡 での試験観測	すばる望遠鏡 での試験、 科学的観測
R&D6 小型多素子大ストローク可変形鏡の開発				
東北大光 工学研究科既存旅	É MEMS 転設を活用し実行	本申請約	東北大光MEMS 経費にて外部発注に	て実行
小型プロトタイプ -ver1試作	小型プロトタイプ -ver2試作	64x64素子プロト タイプ-ver1試作	64x64素子プロト タイプ-ver1駆動	64x64素子プロト
小型プロトタイプ -ver1駆動評価	小型プロトタイプ -ver2駆動評価	64x64素子駆動 回路製作	64x64素子プロト タイプ-ver2試作	タイフ-ver2駆動

改良版の多天体AOシステム



RAVEN collaboration: MOAO Science Verification on Subaru

RAVEN MOAO is a bring-in instrument to Subaru telescope led by University Victoria group (PI: Colin Bradley)

3 NGSs + 1 LGS for tomographic correction in 2 science paths.



RAVEN collaboration: MOAO Science Verification on Subaru

Open-loop wavefront sensor design



From Colin Bradley

RAVEN collaboration: MOAO Science Verification on Subaru

Real open-loop wavefront sensor



TMT-多天体補償光学系の可変形鏡への要求仕様:概略

TMTの補償光学系に要求される基本的仕様は開口のサイズと大気揺らぎの性質から、

- 1. 素子数~64 x 64 素子
- 2. 高空間周波数のストローク = 4um
- 3. 低空間周波数のストローク = 20um
- である。大気揺らぎは低空間周波数でより強いパワーを持つために、 開口が大きくなるほど大きなストロークが要求される(ただし、 カットオフ周波数はある)。

多天体補償光学系ではそれぞれの面分光ユニットが可変形鏡を持つ 必要があり可変形鏡のサイズは 30mm 角程度が望まれる。

TMT-多天体補償光学系の可変形鏡への要求仕様:詳細

Element count	1024 = 32x32 (goal: 4096 = 64x64)
Pitch	300 ~ 1,000 um
Aperture size	10~ 30mm (goal: 20~ 60mm)
Fill factor	98%
Actuator yield	> 99%
Stroke (overall)	20 um
Stroke (at highest spatial freq.)	4 um
Surface roughness (RMS)	< 20nm (goal: <10nm)
Flatness (controlled; RMS)	< 20 nm
Bandwidth	> 100Hz
First resonance	> 1kHz
Hysteresys	< 0.1%
Reflective surface	Gold (Silver) w/ overcoat
Uniformity of surface reflectivity	±1% RMS
Stability	< 4nm
Repeatability	< 4nm
Resolution	< 4nm
Maximum drive voltage	< 300V
Operating temperature	-5° ~ $+15^{\circ}$ (goal: -30° ~ $+30^{\circ}$)
Relative Humidity	0~90%
Altitude	0 ~ 4500 m

小型多素子可変形鏡の現状

• MEMS 技術による小型多素子可変形鏡については現状では Boston Micromachines の独壇場であり、素子数の最大は 25mm角 4092 素子、ストローク 3.5um、ピッチ 400um。高周波数のストロークは十分大きいが、低周波数のストロークは足りない。これまでの検討ではストロークの大きいピエゾ可変形鏡を低周波数の揺らぎを補正 するように併用する (Woofer-Tweeter system)ことが提案されているが、必要な光 学系が増える問題がある。





Boston Micromachines, AO4ELT2 presen, webpage.

小型 大ストローク多素子 MEMS 可変形鏡の開発:光 MEMS 羽根研:呉同(D2)

We propose a new structure membrane MEMS-DM using

Si/HfO2 Bimorph spring



Original Points

- 1. HfO2 crystallization-induced stress is used to introduce large out-of-plane deflection.
- Relatively soft spring structure (small spring constant) instead of fixed posts is used to increase the stroke.
- ³ 3. High optical quality mirror surface is guaranteed by the top layer of SOI wafer and the Si-Si plasma activation bonding.

High-stroke MEMS-DM Structure

小型大ストローク多素子 MEMS 可変形鏡の製作プロセス



小型大ストローク多素子 MEMS 可変形鏡の製作プロセス

(c) Bonding and release

(1) Au-Si eutectic bonding



(2) Actuator chip handle layer etching



(3) Mirror chip handle layer etching

(4)SiO₂ Dry Etching (CHF₃)



(5) SiO₂ Dry Etching (CHF₃)





• Actuator chip と Mirror chip を Au-Si の共晶化接合で接合する。



Actuator chip

Mirror chip

• Au-Si 共晶化接合をプロセスを変えて再度挑戦しアクチュエータチップとミ ラーチップの接合、ミラーチップのリリースに成功し、可変形鏡としての性 能評価を行っている。



mirror with 2×2 electrode array



表面形状



Electrode gap: 20µm



可変形鏡の閉ループ制御と開ループ制御のパスを設ける。











図 21 二つの波面センサで得られた波面の比較。左が WFS1、右が WFS2

電子増幅型CCDを用いた波面センサーの開発

天文補償光学系においてはターゲットが暗いので波面センサーに用いられる検出器は出 来るだけ感度が高く、出来るだけノイズが低いことが求められる。

- CCD では~100%の感度が達成されている。>100 フレーム毎秒の短い読み出し時間では 冷却していれば暗電流は無視できる。読み出しに伴うノイズが低いことが重要になる。
- 電子増幅型CCDでは各ピクセルにたまった電荷を読みだす際に増倍して読みだすことで実 効的な読み出しノイズを抑えることが可能である。





Fig. 2. Schematic of the EMCCD arrays studied here.

電子増幅型CCDを用いた波面センサーの開発

電子増幅をおこなうことで、1-100 photons 程度の低照度においてもショットノイズの 70% 程度のノイズレベルを達成することができる。

電子増幅のランダムさと早い読み出しに伴う Clock Induced Charge が問題である。



FIG. 1.—(*Left*) Output probability of the amplification register of an EMCCD, for a mean gain of 3000 plotted for various amount of input electrons, *n*. The overlapping regions are the result of the ENF induced by the multiplication process. (*Right*) Relative SNR as a function of the photon flux per image, the readout noise of the EMCCD and its operating gain. A saturation level of 200,000 electrons is assumed, the readout noise is 50 electrons unless noted, the dark noise and CIC are neglected.

Daigle et al. 2009

多天体面分光器部の想定:8m VLT/KMOS の例を元に

1.0-2.5um IFU で 7.2' 直径の 24 天体を面分光観測する。それぞれの IFU は 2.8" x 2.8" の視野を 0.2" サンプリングでカバーする。光学系は pick-off 部分 24 台、 IFU 部分 24 台、スリット分光器部分 3 台、で 構成される。Pick-off 部分以降は光学ベンチに固定されている。



多天体面分光器部の想定:8m VLT/KMOSの例を元に

天体の pick-off 部分は 2 軸の回転機構で光学的には再結像系で cold-stop を持つ。



多天体面分光器部の想定:8m VLT/KMOSの例を元に

J

Н

Κ

JH

ΗK

反射系のグレーティング分光器が3台で構成される。どちらの図も下 面がスリット側。15面の反射+1枚レンズ+グレーティング+カメラ 光学系。





- R&D 1. 地表層+多天体補償光学系のシミュレーションに基づくシステム検討 (大野発表を参照)
- R&D 2. 大可変形鏡製作の基礎検討
- R&D 3. オープンループ補償光学系の on-sky 実証実験
- R&D 4. 地表層+多天体補償光学系の実験室実証、高速なトモグラフィー計算の実現
- R&D 5. 多天体補償光学系 RAVEN の on-sky 実証試験
- R&D 6. 小型多素子大ストローク可変形鏡の開発